

～平成30年度 エイズとソーシャルワーク研修会開催～

平成30年6月30日に2年に1度の研修会を開催し、郡山市保健所地域保健課の保健師佐藤隆行さんと医療法人財団荻窪病院のソーシャルワーカー谷内智男さんからご講演を頂きました。

佐藤隆行さんは郡山市保健所地域保健課感染症係を担当されています。郡山市の取り組みとして、(1) HIV・梅毒抗体検査（即日検査）、相談事業、(2) エイズ対策研修会、(3) 思春期保健事業（中学校・高校）、(4) 性感染症予防事業（専修学校・大学）、(5) HIV 検査普及啓発街頭キャンペーン、(6) 世界エイズデー啓発街頭キャンペーン、(7) 新成人への啓発活動（成人式での啓発）、(8) エイズ予防ポスターコンクール、(9) 市政きらめき出前講座があります。

郡山市の現状としては、平成29年度の抗体検査の受検者数は421件と増加しており、当該年度から梅毒検査を同時に行えるようになったことが要因の一つと考えられ、（同時検査は390件程度）受検時のカウンセリング票からは、10～30代が71%、男性が70%、心配な感染経路は性行為が98%（うち①相手が異性72%・同性11%、②相手が特定32%・不特定12%）、過去に何らかの性感染症に罹患したかたが17%、過去に受検歴がある方が4割程度といった傾向が読み取れました。

郡山市保健所としては、性感染症に関する教育の拡充、カウンセリングの充実、HIV抗体検査の普及啓発の3点を課題に挙げ、取り組んでいきたいとのことでした。

※郡山市のHIV抗体検査の詳細はエイズ通信Vol.1を参照

谷内智男さんは荻窪病院にてソーシャルワーカーとして勤務されており、東京福祉専門学校・YMCA・萩国際大学にて社会福祉を教えるほか、日本医療社会事業協会の理事を務めていらっしゃいました。今回は、『つれづれなるままHIV/AIDS』～悪口半分百人分、性革命から2020東京オリンピックへ～というテーマでご講演いただきました。

前半は「Sexuality」についての内容でした。時代の変容と共に様々な「性」の考え方が生まれ、現在の多様性に至ることを学びました。また、セクシャルマイノリティやセクシャリティの構造・分類、ジェンダーリストの話からは、多様な性の存在が身近なものであり、且つ「当たり前」であることが理解できました。同時に、その中には自身の性を証明することや生きづらさを感じている方が数多くいることも知りました。過去の活動として、東京レインボープライドパレードにおいて公益法人東京都医療社会事業協会・埼玉県社会事業協会として協賛を申し出て相談ブースを設置したこと、また他の職能団体に影響を与えたエピソードからは、ソーシャルワーカーの専門性や在り方を垣間見ることができました。

後半は「HIV/AIDS」についての内容でした。現代の「黒死病」と言われ「HIV→AIDS→死」が通説だった時代・宗教的背景から、医学の進歩により治療法がより良いものに変化していること、その一方で、適切な治療に辿り着かない方や根強い差別・偏見といった課題があることを学ぶことができました。



「HIV/AIDS」を正しく理解すること、その上で、ソーシャルワーカーとして、目の前の患者・家族への支援の在り方やその地域に対して何ができるのかを改めて考える良い機会になったと思います。

福島労災病院 千葉和義

❖谷内さんより、たくさんのHIV/AIDS関連資料を提供いただきました。

ありがとうございました。